

研究結果報告書

研究結果

台湾の日治時期における公衆衛生 インフルエンザの場合

日清戦争後、日本におけるはじめての植民地となった台湾で、「公衆衛生を重んじることや医療機構の設立などによって、民心を収攬する」などの理由で、日本政府は進駐するとすぐに医療関係の仕事に積極的に力を注いだ。そのような医学が台湾に与えた影響は広大なものである。本研究は日本が台湾を領有していた期間（1895～1945）内に爆発的に流行したインフルエンザ（とくに史上最大の死者をもたらした疫病・1918～1919年に流行っていたスペイン風邪）の様子を検討したものである。

具体的には共同研究者と積み重ねてきた研究成果の延長として、近年発表された論考の他、西洋、日本、台湾の医学誌、医学専門の教科書、雑誌、新聞などについて調べ、語学、医学史などの面に渡って検討した。

そのような研究の成果として、まずは、百年も前に世界各地で流行した病気の状況を探求する場合（異言語間の資料を照合する場合にも、名称の問題に直面する）、最初にぶつかる名称の問題について明らかにした。日本では「インフルエンザ」「流行性感冒」の他、「grip」「三日熱」「力士風邪」とも呼ばれたことがあるが、広く用いられなかったこと、当時の『読売新聞』『台湾日日新報』では「流行性感冒」「悪性感冒」などが多く使われている、といったようなことが分かった。また、西洋の研究に日本と台湾の資料が不足していることに気付き、本研究では当時の日本と台湾の資料を発掘した。そして、当時日本の措置に対して批判した台湾の研究があったが、本研究では実は当時の厳しい状況の下ではやむを得ない措置で、世界の他の国々でも同様であった、ということを示した。なお、先行研究のミス（たとえば台湾国史館の、医療（インフルエンザ）に関する日本語資料の誤読）も指摘した。上記の研究成果は研究論文などの形で発表した（詳細は文末の通りである）が、まだ投稿中のものもある。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

- ・王敏東*・許巍鐘・蔡玉琳（2011（予定））「漫談日中同形多義詞‘頭痛’」『語文建設通訊』98。

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

王敏東*（2011年8月予定）『影響台湾医学的日本人』橘井文化（共同研究者・許巍鐘との共著論文、及び許巍鐘による序文を含む）